白木峰高原

こどもの城

どわ～の（どきどき、わくわく、のびのび）

諫早市　こどもの城
実績報告書　Vol. 2

はじめに

「ひとが輝く創造都市・諫早」を将来都市像とする本市は、諫早市総合計画の土台づくりプロジェクトの一つとして、こどもの城事業を位置づけ、その実現に取り組んでまいりました。

こどもの城は、子どもたちが生きる力を培うことを目的にして、平成21年３月20日に開館しました。２年目を終え、これまでボランティアとして活躍いただくなど市民の力もあり、24万人を超える多くの利用者を受け入れることができ、市内外からも特色ある施策として注目されています。

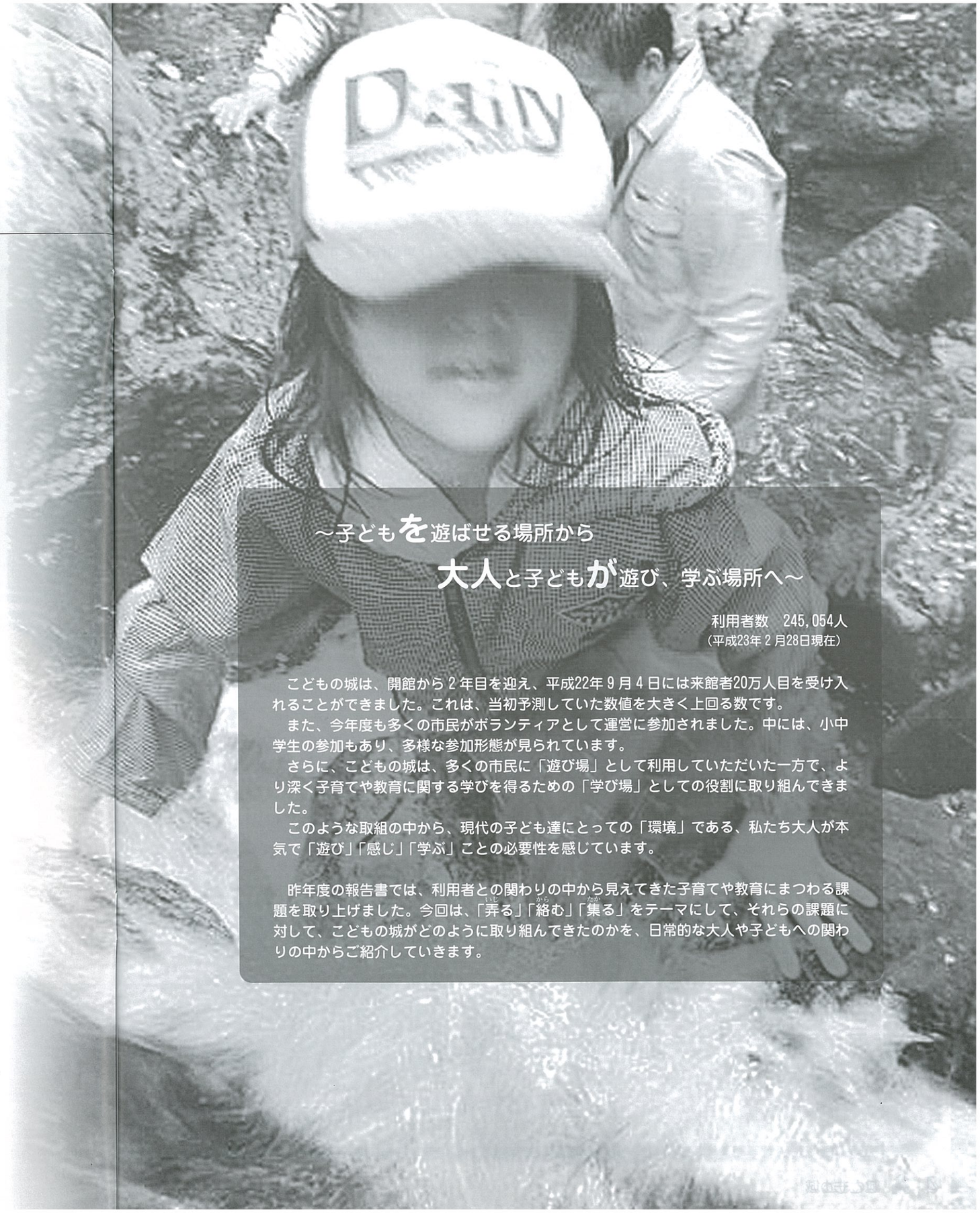
子どもたちの生きる力は、一朝一夕に身につくものではありません。多くの失敗や試行錯誤を繰り返しながら、長い時間をかけて培うものです。このため、こどもの城では、様々な体験の機会を用意し、時には市民とともにその機会を作りあげています。

また、子育てや教育に関して、多様な相談を受けるなど、人々の抱える悩みや問題に市民とともに正面から向き合っています。

今後も実践を積み重ねていく中で、市民の思いを感じながら、必要な取組について研究しチャレンジしてまいります。

平成23年３月

諫早市長　宮　本　明　雄



～子どもを遊ばせる場所から
大人と子どもが遊び、学ぶ場所へ～

利用者数　245,054人
（平成23年２月28日現在）

こどもの城は、開館から２年目を迎え、平成22年９月４日には来館者20万人目を受け入れることができました。これは、当初予測していた数値を大きく上回る数です。

また、今年度も多くの市民がボランティアとして運営に参加されました。中には、小中学生の参加もあり、多様な参加形態が見られています。

さらに、こどもの城は、多くの市民に「遊び場」として利用していただいた一方で、より深く子育てや教育に関する学びを得るための「学び場」としての役割に取り組んできました。

このような取組の中から、現代の子ども達にとっての「環境」である、私たち大人が本気で「遊び」「感じ」「学ぶ」ことの必要性を感じています。

昨年度の報告書では、利用者との関わりの中から見えてきた子育てや教育にまつわる課題を取り上げました。今回は、「弄る」「絡む」「集る」をテーマにして、それらの課題に対して、こどもの城がどのように取り組んできたのかを、日常的な大人や子どもへの関わりの中からご紹介していきます。

第1章 “弄（いじ）る”

手でもてあそぶ。手なぐさみ（なぐさみにするちょっとした遊びや動作）をする。
出典：広辞苑（岩波新書）

こどもの城では毎日のように、利用する子どもたちにスタッフが関わる光景が見られます。中には、人見知りをしたり、初めて対面するスタッフに怯えたりする子どももいます。そんな時、スタッフは、よく手なぐさみをしながら（弄りながら）、「な～んば泣きよっとかあ、こりゃこりゃあ」などと言いながら、諦めずに子どもへの関わりを継続しようとします。少しでも、子どもの抱く怯えや照れの類を緩和しようとしてのことです。

一方で、「弄る」という言葉には、「いじめる、なぶる」という意味や「確かな方針や目的もなしにあれこれと手を加える」という意味もあります。どちらも、子育てや教育にはふさわしくない意味のようですので、もちろん、ここではそのような意味で使っているのではありません。

“弄られキャラ”

ところで、こどもの城でのワークショップに参加した男子高校生たちから聞いた言葉で、こんなものがあります。

「あいつは、“弄られキャラ”ですよ。」

皆さんは、高校生たちがどういう意味で、この“弄られキャラ”という言葉を使っているか解かるでしょうか。後半の“キャラ”とは、キャラクター（人格・性格）の略語です。注意すべきは、前半の“弄られ”という部分です。「弄られ」を「いじめられ」と解釈すると、“弄られキャラ”とは、「いじめられる役の性格の人」という意味にとらえられます。これでは、かなり問題のある使い方です。

でも、ご安心ください。実際に、この時の高校生たちが友人に対して使った場面では、「いじめる・いじめられる」という意味合いで使っていないようです。確かに、“弄られキャラ”は、からかわれる人に対して称された言葉には違いありませんが、“弄られキャラ”の人も、この言葉をある程度喜んで受け入れているようです。むしろ、“弄られキャラ”の人がいることで、周りの雰囲気が明るくなる、皆が黙った状態や困った状態でいる時の切り込み役になる、いわば貴重な人材だという意味合いも含んでいるようです。

「鬼さん、こちら」

思えば、子どもたちの遊びにも、適度な“からかい”は含まれていました。

まず、「鬼ごっこ」には、必ず“鬼”役の人がいます。「だるまさんが転んだ」にも鬼役の人がいます。それどころか、「♪鬼さん、こちら。手のなる方へ」という歌とともに目隠しをした鬼を呼ぶ遊びまであります。一見して悪役に見えてしまう「鬼」ですが、実は遊びのためには必ずといっていいほど必要で重要な役割の人材です。こうした遊びを通して、自分が鬼になった時の対処法を磨くことや、そういった役割の重要性を受け止めることができると考えられるでしょう。先述した“いじられキャラ”は、このような遊びにおける鬼役に似ています。

ところが、こどもの城で「鬼ごっこ」をしているときに、鬼役になったら遊びをやめてしまう子どもが出現してきました。つかまってしまい、鬼になった途端に極度に落ち込んで遊びを継続したい表情をあらわにするのです。“からかい”になれていないのか、鬼役の重要性を理解できないのか、勝ちにこだわっているのか・・・とにかく「自分がその役になるのがいや」と見受けられるのです。これでは、遊びの面白さはどこかに吹き飛んでしまい、鬼ごっこは自然消滅してしまいます。

かつて、日本では多くの兄弟姉妹がいた時代がありました。年上の兄姉は、小さな弟妹の子守をすることが当たり前のようだった時代がありました。背中に負ぶった赤ちゃんに「でんでん太鼓」を見せるなど、弄り、弄られる関係が普通に存在していました。単に回顧的になっているわけではありませんが、子どもたちが弄る、弄られることを通して、集団の中で他者とどうかかわるかなど、いろんなことを学んでいくことは何だか大切なことのように思えてなりません。もちろん、そのことを大人も理解していくことが不可欠だと考えます。そこで、こどもの城が取り組んでいる大人向けの事業の一つ「子育てワンポイントコーナー」について紹介します。

☆子育てワンポイントコーナー

こどもの城では、本年度から乳幼児の子どもを持つ大人のために「子育てワンポイントコーナー」という自由参加できる催しを始めました。この催しの一番のねらいは、昨年度の報告書にまとめた子育てや教育の課題について保護者に啓発していくことです。中でも、乳幼児期の子どもを持つ保護者に対してです。参加するには、一つだけ条件があります。それは、我が子と離れて参加するということです。参加者の多くは母親ですが、参加者が自分の時間を創ることも隠れたねらいとしています。その間、子どもたちはスタッフに預けられます。言い換えれば、スタッフから弄られることになります。

こどもの城では、第3章でふれますが、PTAなど小中学生の保護者向けのワークショップを数多く実施しています。ワークショップに参加した保護者からは、「我が子が小さい時にこのワークショップに参加しておけばよかった」ということをよく聴きます。子育てワンポイントコーナー自体も、そういったワークショップに参加したお母さんが、その後こどもの城でボランティア活動をするようになった中で提案したものです。

しかしながら、実施には若干の問題もあります。

まずは、時間の問題です。PTAなど保護者向けのワークショップは多くの場合、3時間をかけて実施しますが、乳幼児の子どもを持つ保護者が毎日の生活の中で、3時間を自分の時間として確保する（あるいは確保しようとする）ことは難しい場合が多いのも事実です。何よりも、乳幼児の子どもを持つ保護者に参加していただかなければいけませんので、どの程度の時間帯だったら参加できるかを試行錯誤しながら実施することにしました。現在は、毎週金曜日の11：00から、約15分間で、5人定員で整理券を配り、子どもたちが見えない小部屋で実施しています。

次に、内容の問題です。3時間をかけて実施するワークショップでは、参加者がお互いに心を打ち解けられるまでに平均して約1.5時間を要します。そこから休憩などをはさんで初めて、子育てや教育について相互に意見を交換したり、自問自答したりする内容に入っていきます。しかも、その内容は事前に打ち合わせて、○○小学校○年生など独自の問題をテーマとしています。さらには、参加者自身が一連の過程を体験しながら、そこで起きる内容を自分の中に知識として取り込んでいきます。まさに時間をかけて腑に落としていく感覚です。それに対して、15分間の催しでは、得られるものはせいぜい情報です。自家製のハーブティーを提供したり、最後に印象深い音楽を演奏したり、精一杯の工夫をしていますが、そもそもテーマは、こどもの城側がPTAなど先輩にあたる保護者のワークショップで取り扱った内容から抜粋して事前に決めたものです。こんな考え方もありはしないかとか、市内の小学生の保護者たちがこんな問題を克服したといった情報にすぎません。また、短い時間の中で他人に起きたできごとを自分自身のものとして深く考えていくには限界があります。

共感し、受け止める場として・・・

それでも、この催しは今後も続けていきたいと考えています。興味深いことに、参加された方々は終了してもなかなか部屋から出ようとしません。催し自体は15分ですが、その日のテーマについて自分たちで語り合ったり、参加者どうしが意気投合した場合は携帯電話の番号を教え合ったりします。こうして、参加した方々がスタッフに弄られながら泣きじゃくっている我が子と再会するまでには、平均すると30分～45分間かかることになります。中には、「せっかく作った私の時間だから」と語られる方や、「今日は実家の母を子守り役に連れてきましたので」と言われる方もおられ、連続して参加する方も増えてきました。

さらに特筆したいこととしては、15分間という短い時間の中で、涙を流すお母さんも多いということです。印象深い音楽を演奏するなど演出が効きすぎることもありますが、初対面であるはずなのに、自分自身が抱えたり克服したりした悩みを語る方も意外に多いのです。そんな時は、担当者を含め参加した他の方々も即興のカウンセラー役になって、真剣に話を聴き、共感し、受け止めようとします。その場で解決こそできずとも、悩みを打ち明けられる場の一つとして機能していることは非常に興味深いことです。

☆悩んでいる人の2パターン

悩みを打ち明けられる方のことにふれましたが、悩みの内容や受け止め方について若干ふれてみたいと思います。

まず、悩みの内容は多岐にわたります。我が子のこと、我が子の通う幼稚園・保育園でおきたこと、いわゆる「嫁姑」の関係のこと、夫婦間の子育てに関する方針の違いのこと、父親の子育ての放棄あるいは虐待まがいの行為のこと、ご家族や親戚の方の死にまつわること、家計のこと等々・・・。

そういった悩みの受け止め方については、担当者をはじめ他の参加者も真剣に向き合いますが、その場で解決できることはほとんどありません。

「何もできなくてごめんね」と自分のことのように受け止めた他の参加者が言います。

「ううん、聴いてもらえただけでいいんです」と悩みを語った本人が少しすっきりした顔つきで応えます。その場で解決できなくとも、どうやら聴くこと（聴いてもらえること）が受け止め方として非常に重要なようです。

もう一つ、悩みの話題には語尾が2つのパターンで終わることが多いというのも特筆すべきことです。それは、

①「・・・どうしたらいい？」

②「・・・仕方がわからない」

ということです。

①の「・・・どうしたらいい？」の場合、実はすでに悩みを抱える方が自身の解決策を導き出しており、それに同調してほしいという場合も含まれます。誰かに「それでいいよ」と言ってほしい場合です。そのように感じた場合は、ちょっと違った視点で切り返してみます。例えば、

「さあねえ。いいか悪いかわからないねえ。でも、いいのか悪いのか先にわかってちゃ、つまんなくない？　まずやってみてから考えるのはどうかな？」

などです。

もちろん、解決策を導き出せないまま混乱し、五里霧中の状態である場合もあります。そのような場合は、「あなたはどうしたいのかな？　聴いているからゆっくり話してみて」などと反応してみます。

②の「・・・仕方がわからない」の場合は、例えば「仕方はわからないねえ。お店にも売っていないし、いっしょに考えてみる？」とか、「今、思っていることがあるなら、まずやってみてから考えてみない？」などと反応してみます。

①の場合も、②の場合も、共通することは、「こうすればうまくいく」といったお墨付きを与えられた一種の万能薬とその薬効を求めているように感じられることです。よく考えてみると、他人の仕方が自分に当てはまるのか，また自分にできるかどうかもわからないのですが・・・。

悩んでいる保護者は、一刻も早くその状態をよりよく抜け出したいと考えています。しかし、こどもの城のスタッフは人々が抱える多種多様な悩みに対して「こうしたらいい！」と言えるものは持ち得ません。私たちができることは、悩みを抱える保護者の気持ちに共感しようとし、共に考えようとし、悩んでいるというありのままの状態を受け止めようとすること（カウンセラーの条件とも言われること）です。こどもの城は、もう少しこのことを意識して取り組んでいきたいと思います。

☆非言語のコミュニケーション

昨年の報告書でもふれましたが、こどもの城の特徴として、利用者（特に、子どもたち）との直接的な身体接触をともなうコミュニケーション手段を実施していることが挙げられます。もっとも、そのことを喜んで受け止めるか否かは、人によって個人差があります。しかし、こどもの城は、もう少しこのような利用者とのコミュニケーション手段にチャレンジしていくつもりです。なぜなら、このようなコミュニケーション手段をとる施設や機関が他にあまり類を見ず、こどもの城の特徴となっているからです。そして、複数回利用される保護者に、そういったことを期待されている方が多いという現実があるからです。弄りながら子どもに近づいていくのは、スタッフとしても相手の反応を見ている前段階にすぎません。そこからプロレスごっこやくすぐり合いに発展する場合もあります。会話中心でなく非言語のコミュニケーション手段です。もう、「理屈じゃない」という領域の関わり方で、本来、家族など親しい間柄で行われる関わり方です。

もうひとつ、非言語のコミュニケーションについて、大学生がボランティアの実習に来たときのことを紹介します。

大 学 生：「質問したいことがあります。どうして、こどもの城のスタッフは、子どもたちの名前に“君（くん）”や“さん”、“ちゃん”などをつけないで呼ぶのですか？」

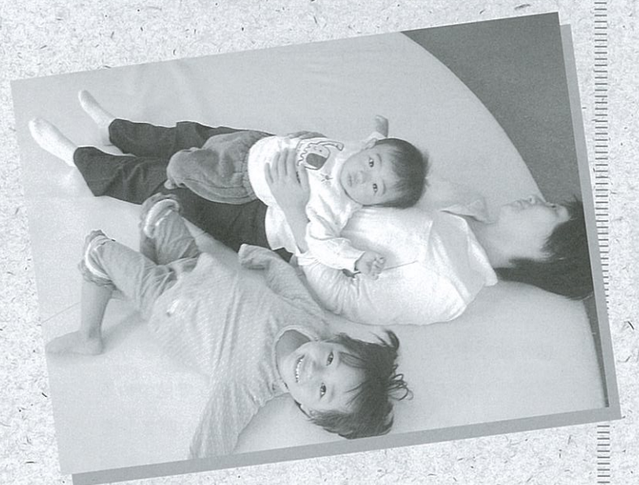
スタッフ：「あらためて訊かれれば、考えたことがありませんでしたね。強いて言えば、子どもたちと親近感を持ちたくて呼んでいます。多くの家族でやっているようにね。中には、必ず、“君（くん）”や“さん”、“ちゃん”をつけて呼ぶスタッフもいますよ。」

大 学 生：「私の行っているサークルでは、子どもたちを呼び捨てにしてはいけないというマニュアルがあって、呼び捨てしないように先輩方から指導されます。そういう学校もあると聞いています。」

スタッフ：「呼び“捨て”にしている感じではありません。むしろ、“呼びかけ”ですね。逆に訊きたいのですが、なぜ、そのようなマニュアルがあるのですか？」

大 学 生：「やはり、親からクレームなど来ないようにするためです。」

スタッフ：「クレームが来るようにとは言いませんが、こどもの城では、一歩踏み込んで保護者と語り合いたいと考えています。むしろ保護者と、いい意味でぶつかってみたいと考えていますので、目的が違えば手段も違うのですね。」



こどもの城では、“君（くん）”や“さん”、“ちゃん”をつけずに子どもたちに呼びかけるスタッフが多くいます。どちらが良いか悪いかでなく、この大学生の質問は、スタッフにとっても運営について考えるいい機会になりました。

こどもの城ボランティア養成事業の講師を努められた松木正さん（環境教育事務所マザー・アース・エデュケーション代表）は語ります。「学校などでは生徒が望ましくない行動をすると、よく『問題行動』と言います。でも私は、多くの場合、それは『問題』でなく『現象』ではないかと考えています。木で言えば地上に見える幹や枝葉です。『問題』とは問うべき課題ですから、根っこになります。根っこにふれなければ、また問題は枝葉という現象になって出てきます。」

松木さんが言われるように、表面上のことを取り繕っても、子どもたちをめぐる現代的な課題は解決できないのではないかと考えます。したがって、こどもの城では、子どもたちを理解していこうという深い愛があるかどうかを時々自問自答しつつ、これまで通り、子どもへの呼びかけにマニュアルを作らずにやってみます。

第２章では、非言語のコミュニケーションについて、もう少しふれてみます。

第2章 から “絡む”

離れずにまきつく。まといつく。まつわる（関係する、関連する）。

（出典：広辞苑（岩波新書））

こどもの城では、毎日のようにスタッフと子どもたちとの“絡み”合いが展開されています。昨年度報告書のCommunication（ふれあい）の章でも触れましたが、こどもの城では、「抱っこ、チュー、こちょこちょ」を合言葉にして、子どもたちとの直接的な身体接触にチャレンジしています。

第2章では、そんな“絡み”合いの日常を紹介します。

“遊んでくれるお兄さんお姉さんがいるのはここだけ？”

平日のこどもの城利用者は、3歳ぐらいまでの子どもが多いですが、土日となると、4，5歳～小学校の低学年ぐらいの子どもたちも多く利用しています。まさに、わんぱく盛りの年代です。必然的に、スタッフとの戦いごっこやプロレスごっこなど“絡み”合いが始まります。

なかには、強烈な絡み合い（まさに、離れずまきつく!!）をしてくる子どももいます。その様子を微笑ましく見つめるその子のお母さんを見つけての会話です。

「この子は元気のよかですねぇ～。家でもこんな感じですか？」と、スタッフ。

「普段はお父さんが遊んでくれんもんねぇ・・・。」と、お母さん。

中央教育審議会（平成18年）の報告によれば、「子どもの情動（喜怒哀楽のような表情・動作）の発達の基盤として、乳幼児期における、親子間の愛着形成が重要な役割を果たす」とあります。

＊「愛着」とは・・・

人と人との間で形成される相互の親和性（相手と一緒にいることを望み、一緒にいることで大きな安心感、満足感が感じられる関係）のことである。愛着には「相互的な関係」「情緒的な関係」「身体接触的関係」という点で友人関係とは、異なるものとなる。（「子どものこころ特別委員会」報告書、第19期日本学術会議・平成17年より）

一方で、日本の父親の子育てに対する関与の度合いの低さも、調査結果をもとに指摘されています。残念ながら、こどもの城においても、せっかくお父さんが一緒に来ているのに、椅子に座って携帯をいじっていたり、駐車場の車の中で眠っていたり・・・などということもよく見かけられる光景です。粘り強く子どもたちとプロレスをしているスタッフやボランティアを、一種の憧れの眼差しで見つめるお母さんも見かけます。「うちのお父さんがアレをやってくれないかなと思って見ていました。」と語られます。

そんな時には、折を見て、お父さんに“絡む”ことにもチャレンジしています。“絡む”には、「難癖をつけるなど、しつこくまとわりつく」という意味もあるようですが、この場合は決してお父さんに苦情を言いたいのではなく、むしろお父さんを引き込みたくて誘っている感じです。もっとも、反応が弱い場合も多いのですが・・・。

こどもの城は、遊び場機能とともに、学び場機能も持っています。大人も子どももともに学び育つことを目指しています。日曜日に連れて来たことで満足せず、一歩踏み込んでお父さんも関わってほしい、遊び疲れたら寝ていてもいいから、まず遊んでほしい。誰よりも、子どもたちがそう願っているように思えてなりません。

大人も遊べるか

お父さんたちの気持ちもわからないではありません。子どもたちと体でぶつかり合っていくことは、かなりの体力と根気を必要とします。ちなみにスタッフの間では、知らない内に口の中が切れていたり、急所を蹴られて悶絶したりということがよくあり（3、4歳児でも、けっこう痛い!!）、休憩時間に吐き気をもよおす、夜に首が痛くなるという裏話も紹介しておきます。それでも、こどもの城では、このような“絡み”をやめるつもりはありません。

それぞれの家庭において、環境の違いや子育てに関する考え方があると思いますが、スタッフに対して身体ごとぶつかってくる子どもたちを見ると、応えたくなります。遊んでくれるお兄さん・お姉さん、絡んでくれるおじさん・おばさんがいるのは、ここ（こどもの城）だけという声も聴きます。そして、それが私たちにできることであり、今、必要なことではないかと考えます。

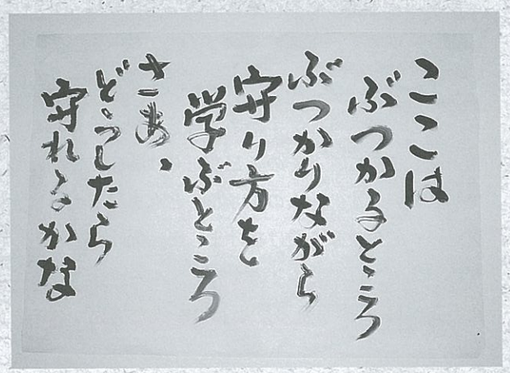
“痛くないプロレスごっこがあるか！”

こどもの城で、子どもたちがぶつかることの多い場所の一つが、サイバーホイールと呼ばれる回転系の遊具付近です。そこには、こんな文字が貼ってあります。

「ここはぶつかるところ　ぶつかりながら守り方を学ぶところ　さあ、どうしたら守れるかな」

「子どもたちが変わった」とは、近年よく耳にすることですが、むしろ、子どもたちをめぐる生活環境や遊び方が変わったのではないでしょうか。子どもたちが（もしかしたら親世代も？）身体接触や人との関わりが少ないためか、小さな子を思い切り叩くなど加減が分からない、叩くと危ない部位を知らない、転び方が危ない、勝つようにしてあげないとダダをこねる等の現象も多く見られます。身体ごとぶつかりあって遊びこんだ経験が足りないのではないのでしょうか。これでは、他人の痛みなど解かるはずがありません。こどもの城での“絡み”は、そういった痛みを体験するチャンスだとも考えられないでしょうか。もちろん、そこには痛みを伴うという身体的・精神的な危険も潜みますが・・・。

ある時、よく子どもたちに“絡む”ボランティアのお兄さんに、多くの子どもたちが群がって、プロ



絡み合いから学ぶ

レスごっこが自然発生しました。中には、2歳程度の小さな女の子も混じっており、お兄さんはその子を守りながら小学生の男児の相手をしていました。小さな子が前から抱っこをねだります。後からは、男児の本気の蹴りが容赦なく繰り出されます。

「おい、小さな子を抱っこしている時に後から蹴るな！」お兄さんの警告が2度出ました。

でも、男児は蹴ることを止めません。それどころか、いかにも悪そうな顔つきになって、お兄さんが小さな子を抱っこする隙さえうかがっています。3度目に蹴った瞬間に、お兄さんは素早く男児をつかまえて、柔らかいマットの上に男児を引きずり込みました。

「『蹴るな』って何回も言ったろうが！」多少の優しさも交えながら、お兄さんが叱責します。男児の存在（Being）を叱責しているのではないのです。男児の行い（Doing）を叱責しているのです。

でも、この時の男児は、すでに聞く耳を持ちませんでした。叱責された経験が少ないのでしょうか、お兄さんの叱責を感じることもできないかのようです。男児は半ベソをかいて多少のパニックになっていたからです。

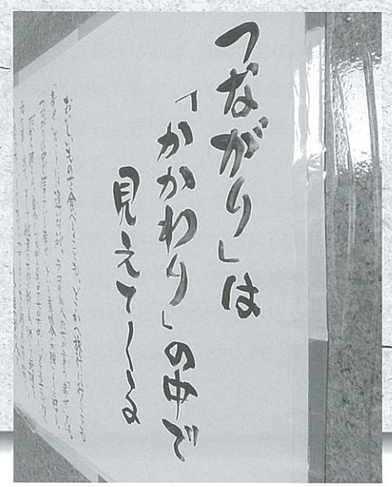
さて、皆さんが、ボランティアのお兄さんだったら、こんな時どうしますか？　自分は子どもたちの相手をしていて、多くの子どもたちは笑顔で“絡んで”きています。一人の小さな子どもを守るために、男児の本気の攻撃を受け続けました。危険なことも含めて、男児に“絡み”方を教えてやろうとつかまえた途端に、「やられる立場」になった男児が、あたかも被害者であったかのようにベソをかき始めました。周囲には多くの利用者の目もあります。次を読む前に考えてみてください。

実はこの時のお兄さん、男児を肩に担ぎ上げ、大きな声で何か言いながら館内を歩き始めたのです。

その時のセリフが、「痛くないプロレスごっこがあるか！」でした。

閉館後に、スタッフとボランティアのお兄さんとでミーティングが行われました。お兄さんが言うには、「僕も生身の人間です。正直、蹴りは大人でもかなり痛かったです。でも、男児が“やられ役”になった時のことを学ぶいい機会ではないかと思いました。親が近くで見ていたのを知っていたので、今からこの子に教え込みますよということを親にも伝えたかったのです。結局、親は出て来ませんでした。いつもは少々荒っぽくふれあっても、ほとんどの保護者から『ありがとうございました』と言われるのですが。」とのことでした。ちなみに、担がれて館内を連れまわされた後、男児はお兄さんとマットに座って世間話をしていました。

なお、ミーティングでは、一つの正解を導き出すことはしませんでした。お兄さんの言動が正しいか否かはわかりません。ただ言えることは、他に、そんなことをしてくれる人や場所が少ないのではないかということです。だからこそ、こどもの城は、そういったことに、これからもチャレンジしていこうということです。そういったことが必要だという信念と、子どもたちへの深い愛を抱きつつ。



第3章 たかる “集る”

寄り集まる。

出典：広辞苑（岩波新書）

「たかる」という言葉を漢字にすると、「集る」と書くことは多くの人が知りません。学校の研修会に招かれた時に先生方に問うてみても、ほとんどご存知ありません。こどもの城は開館して約2年で多くの人々が集まりました。どちらかというと、「集める」よりも「集まる」を意識して運営してきました。「集める」は施設側の都合で使われる場合が多い言葉ではないでしょうか。かたや、「集まる」は利用者・参加者の自発意識に基づいて使われる場合が多い言葉のように思えます。利用者の視点で言えば、こどもの城の利用方法は大別して2つあります。予約・申込みをせずに利用する方法と、事前に予約・申込み・打合せをしてから利用する方法です。したがって、後者の場合は利用者というよりも「参加者」という方が適切かもしれません。また、後者の場合は参加される方々の願いを把握・整理できるため、スタッフも支援・助言がしやすく、深い内容でかつ独自のプログラムが展開できるという特徴があります。ワークショップに参加された方が、こどもの城について、こんな表現をされました。

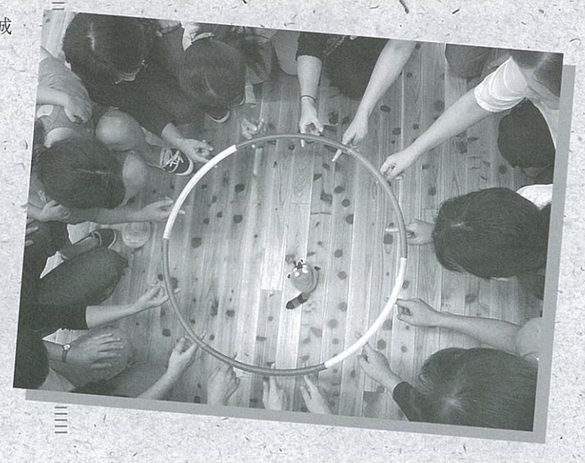
～フラっと来れば遊ぶとこ、
ねらって来れば深いとこ～

第3章では、ねらって来る取組について紹介してみます。

親のワークショップ

こどもの城では、PTAなど親のワークショップを多く実施しています。開館前から、こどもの城の理解促進の取組として始めていたこともあって、こどもの城が募集しているわけでもないのに、依頼が多く舞い込みます。

子どもや親のコミュニケーション、発達障害、先生と保護者の関係構築、地域の中での健全育成など、子育てや教育に関する様々なテーマについて、受身ではなく参加型で考えていこうとするのが、親のワークショップです。こういったテーマは、正解が一つだけあるというものではありませんので、多く



の視点で考えてみるように進めていきます。また、参加者自身が寛容な態度で臨み、他者の多様な考え方を受け入れられるよう楽しさを前面に出して進めます。さらに、単に情報を得るだけではなく、親自身が深く心に刻むために講義よりも体験の時間を多く割いて進めます。つまり、ワークショップは、3つの「た（E）」で展開されていきます。

たのしく（Enjoy）
たいけんして（Experiences）
たがいに（Each other）

です。参加された方が、「他の人と、笑いながら、楽しみながら、スッと心に落ちてくる」と表現されたこともありました。情報が溢れた現代の親にとっては、他者と自身を見つめ、深めていくことこのような学び方が合っているのかもしれません。今後も、こどもの城は、このような依頼に正面から向き合っていきます。

ちなみに、ワークショップで場を進めていく役割の人をファシリテーターと呼びます。こどもの城のスタッフがその役割を依頼されるのですが、ファシリテーター役のスタッフは、参加者の考えを引き出そうとし、いろんな視点を投げかけようとし、テーマを意識しつつ場の楽しさを維持発展させようと努力します。この際、ファシリテーターは依頼されたことに基づき進めていきます。したがって、ワークショップを実施する場合には、事前の打合せが不可欠になります。

ワークショップ後の日常が大切

また、留意点としては、ワークショップの中身そのものよりも、それを日常の生活に生かしていくという視点を常に持ち続けることに意味があることを忘れてはならないということが挙げられます。確かに、ワークショップは楽しく学べて、居心地のよい空間です。しかし、ワークショップに参加すれば、それで日常の悩みが解決する、子どもや親が激変するということではありません。ワークショップは、あくまでも気づき、学びの場であり、それを現実場面で行動に移すことは別物です。ワークショップを企画し、実施すれば私の役割は終わったと考えるのもいかがなものでしょう。PTA などの取組としては、むしろ、ワークショップを企画している間や、ワークショップ後にどう行動し、深めていっているのかということに視点をあてることが大切であると考えます。

参考までに、こういった学び方を体験学習と呼びます。体験学習を実践研究している方々は、よくコンテンツ（体験の中身）とプロセス（体験の過程）という言葉を分けて使います。体験学習は、体験することそのものよりも、その過程での学習者（参加者）の気づきや行動にこそ意味があるということが言われるからです。ワークショップを実施する際はプロセスに焦点をあてて実施するよう、今後も取り組んでいきます。

出前の取組

こどもの城では、ワークショップや学校の授業に出向いていく取組も実施しています。

諫早東特別支援学校は、子どもたちの生きる力を培うために、肥前長田駅からこどもの城までの徒歩を計画しました。この計画では、生徒たちは、担当するこどもの城のスタッフと当日に初めて出会うことになります。生徒たちは、初めて出会う人がどんな人か探りながら遠距離を歩行することになります。「きつい」などと初めて出会うスタッフに言えるのか、笑顔のない道中になるのではないか、歩いただけに終わるのではないかなど、いろんなことが想定されました。そこで、スタッフが事前に学校に出向き、生徒たちと関係を構築する試みを提案しました。その結果、当日はスタッフと生徒たちが相互に笑顔で名前を呼び合いながら、全員が最後まで歩行することができました。

長崎ウエスレヤン大学や活水女子大学は、保育士や教師を目指す学生の実習を依頼されました。実施当日は体験の時間を多く取りたいという要望でしたので、事前に学生たちが目的を認識し、共有する授業にスタッフが出向き、事後には、学んだことを整理するため再び授業に出向くことにしました。

体験学習法を用いた実習

このような取組に共通することは、一連の流れがあるということです。その流れとは、

目的の共有（いったい何のためにするのか、何を目指すのか参加者と共有する）
関係の構築（参加者間の学びが促進されるよう、知り合う、解かり合う）
実際の体験（こどもの城が位置する白木峰の自然環境を生かして、気づくこと、感じることを引き出そうとする）
ふりかえり（気づき、学んだことを自分の中で整理し、次なる行動への動機とする）

です。このような流れを通して学びを深めていくのです。学校などで体験学習を取り入れることの意味は、ここにあります。単に、一過性の体験をして「おもしろかったです」と感想を述べて終わりということではありません。

ちなみに、先述した親のワークショップを地域の公民館や学校で実施したいという依頼もあります。参加する親の仕事の都合で、どうしても夜間などコミュニティの場所で実施したいという場合です。このような場合にも、可能な限り依頼に応えるようにしています。しかし、忘れてはならないのは、普段と違う場所での気づきの多さです。経験上、日常のコミュニティで実施するワークショップよりも、普段と少し違う場所にあるこどもの城で実施するワークショップでは、参加者の気づきが格段に違うと感じます。あるお母さんが、「デートで稲佐山にドライブに行くような感じ」と言われたことがあります。デートと学びは目的が異なるものの、大切な人と過ごすという点では似ていて、この表現は興味深く感じます。

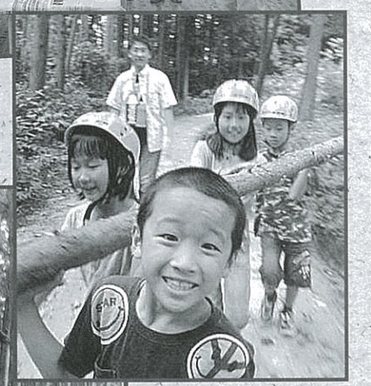
他にも、人が“集る”様々な催しや「ボランティアをしたい」と集ってきた小中学生のことを紹介しておきます。

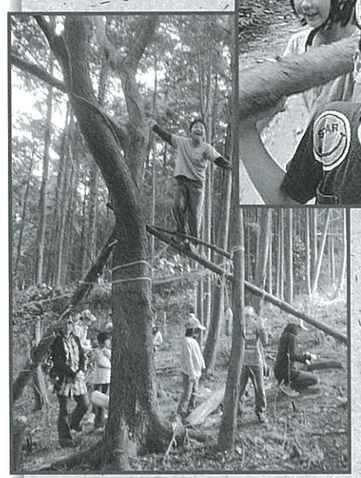
“様々な催し”

こどもの城には、市民のボランティアなど様々な方や団体が、スタッフと連携して様々な工夫を凝らした催しを実施していただいています。このような催しは、土日や夏休みなどを中心に展開しており、利用者が自由に参加できるようになっています。

個人の特技を生かした催し

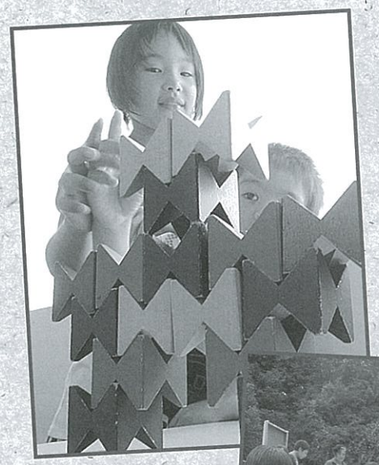
子ども向け生け花・抹茶体験、二胡やピアノなどの音楽演奏、手話体験、打楽器を使ったワークショップ、英語を使ったコミュニケーション・ワークショップ、ペットボトルを使った風車など工作、絵手紙体験、ロープワークやツリーハウス作りなど野外活動





団体の活動を生かした催し

ラベンダーの植樹、地元の郷土料理の提供、世界のおもちゃ展示、昔の遊び展示・体験、人形劇の講演、ポスターや絵画の展示、どんぐりの苗木植樹・管理



その他

ティピ（アメリカ先住民族のテント）の寄付

ティピと焚き火の風景

＝こどもの城とライオンズクラブ＝

『どんぐりの林づくり』事業は、地区ガバナー提言「未来のためにさらなる一歩を」のもと、「環境保全・地球温暖化防止へ一歩前進（ゾーン内にどんぐり50本植樹の実施）をゾーン内６クラブの合同奉仕活動として取り組んだものです。

諫早市のライオンズクラブ活動への理解と協力をいただき実施した平成22年２月14日には、会員の他、こどもの城・白木峰をみどりにする会・ボーイスカウト・ガールスカウト・諫早レオクラブの皆さんにも参加をいただき、約50人で50本の苗木を植えました。

植樹の場所は、「未来ある子どもたちが集う・こどもの城」と「景勝地で子どもからお年寄りまで自然に親しめる・白木峰高原」を結ぶ市道沿いにあります。どんぐりの木の成長を願い、春・秋には草刈や手入れを予定しています。

近い将来、この場所が「どんぐりの実」ひろいや「カブト虫」とりなど、子どもたちや親子の交流の場となることを期待しています。

ライオンズクラブ国際協会337－C 地区２Ｒ３Ｚ　前ZC　藤田　敏夫

“子どもボランティア”

今年度は、ボランティア活動をしたいと申し出た小中学生が出現しました。研修を受け、正式に登録したボランティアとは違いますが、自ら申し出て（自発性）、みんなのために（公共性）、対価を得ず（無償性）、自ら考え工夫して（先駆性）活動に取り組んでいることは、まさにボランティア活動そのものです。

現在、活動している市内の小中学生は、次の３人です。

須賀久美子　さん（北諫早中学校２年生）
渋谷　知央　君　（上山小学校４年生）
宮崎　百花　さん（みはる台小学校３年生）

須賀久美子さん

渋谷　知央君

３人とも、自分で考え行動するという生きる力そのものを意識し、できるだけスタッフの指示を受けずに、ゴミ拾いや小さな子どもたちの子守りなどの活動をしています。抱いている子どもを落としそうになったり、約束の時間に集合していなかったり、３人は多くの失敗を繰り返しながら活動しています。

宮崎　百花さん

＝ちひろの作文＝

こどものしろ

渋谷　知央

ぼくは、こどものしろで変わったことがあります。

一つめは、PA（プロジェクト・アドベンチャー）をして変わったことです。PAをして、かわったことは、チャレンジということです。

チャレンジということは、とても大切なことだと思うので、もっといろんなことをチャレンジしたいと思います。

二つめは、ボランティアです。ボランティアをして変わったことは、自分でもできることを見つけられたことです。前の自分は何もできなかったけど、自分でもできることを見つけられたのでよかったです。

この、ボランティアとチャレンジをがんばって、いろんな人と仲よくできるような人になりたいです。

３人の活動は、半強制的にやらされたボランティア体験でなく、自ら行動したボランティア活動です。その行動力に、私たち大人も学ぶところが多くあります。また、３人が「自分が人の役に立っているという存在感」を感じながら成長していることが、とても嬉しいことです。このような小中学生の活動は今後も受け入れたく、利用者の皆様もあたたかく見守っていただきたいと思います。

利用状況

総利用者数	245,054人（２月末現在）

平成22年３月～平成23年２月利用者数　104,933人

◆月別利用者数

	平成22年３月～23年２月
３月	10,259人
４月	8,509人
５月	10,729人
６月	7,295人
７月	9,674人
８月	12,499人
９月	10,125人
10月	12,300人
11月	6,875人
12月	4,308人
１月	6,021人
２月	6,339人

１　利用者層の傾向

～利用者層は、前年度と変わらず、【表１】のような傾向にある。

・市外の幼稚園・保育所のバス遠足などの立ち寄り利用が、平成２１年度の６２団体から４２団体に減少している。
・平日は、母親と乳幼児（１人～２人）連れの利用者が多く、特に子育ての悩みを抱える母親の利用が増加し、一部、サークル化している。
・日曜日は、平日や土曜日と比較して、父親の利用が多いものの、積極的に我が子や他人の子とふれあう父親は少ない。
・土曜日や日曜日（特に、午後）は、諫早市外の利用者が多い。
・平日は、小学生はほとんど来ない。
・利用のきっかけで際立って多いのは、口コミである。

【表１】

	乳児	幼児	小学生	保護者	祖父母
平　日	◎	○	―	◎	△
土日祝日	○	◎	◎	◎	○

記号（割合が、◎とても多い、○多い、△普通、―少ない）

2 複数回利用者（リピーター）の傾向

・複数回利用者（リピーター）は、平日においては９割超を占める。
・約１０家族が、週に３～４日利用される。
・複数回利用者（リピーター）には、職員とのふれあいを求めて来られる乳幼児と母親が多く、一番の利用目的になっている。

3 時間帯別入館傾向

・時間帯別入館傾向は、下記【表２】のような状況にあり、特に冬季の平日においては、早い時間帯の来館が少ない傾向が見られた。
・早い時間帯の来館を奨励するため、土日祝日の開館直後は、人気メニューの「１０ｍの壁にチャレンジ」を２０人限定で実施しているが、１０月末までは開館前から利用者が並んでいる傾向が見られた。

【表２】

時間帯	平日割合		土日割合	
	夏季（８月）	冬季（12月）	夏季（８月）	冬季（12月）
9:00～10:00	8％	2％	10%	6％
10:00～11:00	18%	2％	17%	14%
11:00～12:00	22%	44%	18%	12%
12:00～13:00	13%	7％	12%	25%
13:00～14:00	12%	27%	13%	9％
14:00～15:00	10%	4％	17%	12%
15:00～16:00	8％	4％	7％	16%
16:00～17:00	4％	4％	1％	1％

＊小数点以下切捨て

4 傷病等の様子

（ア）救護室で処置をした件数は、１７件
　　（一時休養、打撲、擦過傷、虫刺され）
（イ）通院等の保険適用件数４件

ボランティアの活動状況

のべ活動人数		428人
登録者数	（リスクマネジメント研修受講後）	68人

※２月末現在

ボランティア活動の共通認識
～できる人が、できるときに、できることを～

1 ボランティアの活動内容

① プレイリーダー的な活動

学生など、主に土日に活動される方は、いっしょに遊ぶ、遊びを見守る、利用者と子育てについて語る、赤ちゃんを抱く、プロレスごっこの相手をするなど、利用者対応の活動を行っている。

直接的な身体接触を伴うため、気力・体力ともに必要で、かつ安全に関する知識・技術が要求される活動である。

② インストラクター的な活動

現役の保護者など、親のワークショップに参加したことをきっかけに活動を始めた方は、主に平日夜間や土日祝に実施している「大人のための子育て応援事業」において、ワークショップの補助などの活動を行っている。

これらの方は、自身が所属するＰＴＡ活動に積極的に参加し、こどもの城と共催したワークショップの企画をするなど、活動の日常化（我が家の子育て力向上）を強く意識した活動であり、結果的に事業の広報的な役割を担う活動にもなっている。

また、お茶、活花、音楽などの指導者の方々は、土日に自由に参加できる子ども向けのイベントを担当していただくなどの活動を行っており、活動内容に関して専門性の必要な活動である。

③ その他の活動

地元の方などは、施設周辺の草を刈る、鯉のぼりを立てる、正月の門松を飾る、資材の提供など、施設の環境整備活動を行っている。

スタッフにとっても、緊密で良好な関係が必要になる活動である。

2　ボランティアへの情報提供と研修

①　毎月第二日曜日に、ボランティア希望者が集まり、話し合って実施している

（ア）こどもの城からの情報提供
当該月～翌月末までの申し込み団体、その日利用者向け催しの紹介

（イ）ボランティアどうしの情報交換
ボランティア主催のイベントや研修の呼びかけ
時には、ＰＴＡと共催したワークショップ実施に向けて、当該校の保護者が、ボランティアへ情報提供・依頼するために参加される場合もある

②　ボランティア等養成事業の実績

◆平成２２年５月２１日㈮ほか
安全に関する研修（リスクマネジメント研修）
講師：こどもの城スタッフ

◆平成２２年１１月２１日㈰
周辺自然環境研修
講師：宮崎正隆（諫早自然保護協会理事）

◆平成２３年２月１１日㈮～１２日㈯
体験活動を支援する研修（ファシリテーション研修）
講師：こどもの城スタッフ

◆平成２３年２月１９日㈯～２０日㈰
カウンセリング研修
講師：難波克己（玉川大学心の教育実践センター主任代理）

◆平成２３年３月２６日㈯～２７日㈰
企画研修
講師：松木正（環境教育事務所マザーアースエデュケーション代表）
大島一（環境教育事務所マザーアースエデュケーションスタッフ）

申込み団体一覧

（２月末）

利用日	団体名
◆保育園等	
５月13日	ほなみ保育園
５月15日	深山保育所
５月15日	長田くみあい保育所
６月11日	ともしび保育園
６月19日	すこやか保育園
11月14日	サンタの家保育園
◆幼稚園	
５月27日	不二幼稚園
６月２日	高来幼稚園
６月25日	清水幼稚園
11月24日	諫早市立３園合同会
12月11日	西諫早幼稚園
◆学童保育	
４月13日	わんぱくキッズ
７月４日	市学童保育指導員連絡協議会
７月28日	中里・喜々津小学校児童クラブ事前研修
８月10日	中里・喜々津小学校児童クラブ
８月17日	湯江小学校学童保育１・２年生
８月18日	中里・喜々津小学校児童クラブ
◆子育てサークル・センター等	
５月７日	くるみの家
５月15日	プリママ通信
11月10日	もんもんクラブ
12月17日	もんもんクラブ
12月23日	サークル松田
◆ＰＴＡ	
５月13日	市ＰＴＡ連合会母親委員会
５月20日	西諫早中学校ＰＴＡ教育教養部
５月22日	長田小学校６年２組ＰＴＡ
５月22日	長田小学校６年２組児童
６月５日	北諫早小学校３年２組ＰＴＡ
６月５日	北諫早小学校３年２組児童
６月19日	湯江小学校３年２組ＰＴＡ
６月19日	湯江小学校３年２組児童
６月26日	北諫早小学校３年１組ＰＴＡ・児童

利用日	団体名
◆ＰＴＡ	
6月27日	高来西小学校３年１組ＰＴＡ
6月27日	高来西小学校３年１組児童
7月３日	上山小学校１年２組ＰＴＡ
7月３日	上山小学校１年２組児童
7月10日	湯江小学校５年２組ＰＴＡ
7月10日	湯江小学校５年２組児童
7月16日	西諫早中学校ＰＴＡ教育教養部
7月17日	真城小学校２年生ＰＴＡ
7月17日	真城小学校２年生児童
7月30日	森山東小学校５年生ＰＴＡ・児童
9月25日	小栗小学校３年２組児童
10月９日	小栗小学校ＰＴＡ
10月23日	湯江小学校３年１組ＰＴＡ
10月23日	湯江小学校３年１組児童
10月24日	真崎小学校２年生ＰＴＡ・児童
11月６日	小栗小学校１年生ＰＴＡ
11月６日	小栗小学校１年生児童
11月10日	諫早市ＰＴＡ校外指導部
11月13日	上山小学校３年生ＰＴＡ・児童
11月25日	真崎小学校保健委員会
12月４日	喜々津小学校５年１組ＰＴＡ
12月19日	西諫早中学校２年１組ＰＴＡ
1月22日	上山小学校１年生ＰＴＡ
1月29日	諫早市ＰＴＡ教育教養部
2月３日	真津山小学校５年生ＰＴＡ（事前研修）
2月26日	真津山小学校５年生ＰＴＡ
◆学校	
4月１日	諫早農業高校テニス部
4月13日	長崎日大中学校１年生
5月18日	諫早高校ソフトボール部
6月２日	高来中学校テニス部
6月10日	諫早特別支援学校中等部
7月２日	森山中学校
8月３日	諫早中学校剣道部
8月６日	諫早市教育研究会生活総合部会
8月９日	森山中学校職員研修
9月８日	諫早東特別支援学校
9月17日	虹の原特別支援学校みさかえ分校

利用日	団体名
◆学校	
9月29日	諫早東特別支援学校
10月６日	諫早特別支援学校３年生
10月12日	活水女子大学子ども学科１年生事前授業
10月13日	諫早東特別支援学校
10月19日	飯盛西小学校３年生
10月30日	活水女子大学子ども学科１年生　フィールドワーク
10月30日	諫早中学校剣道部
11月２日	活水女子大学子ども学科１年生フォローアップ
11月３日	諫早中学校剣道部
11月４日	虹の原特別支援学校
11月７日	諫早東特別支援学校（事後授業）
11月７日	諫早中学校剣道部（事後支援）
11月10日	諫早特別支援学校５年生
11月11日	諫早特別支援学校２年生
11月25日	真崎小学校６年生授業
12月16日	諫早東特別支援学校職員研修
12月25日	北諫早中学校吹奏楽部
12月27日	長崎日大高校デザイン美術科
1月５日	北諫早中学校テニス部
1月９日	創成館高校吹奏楽部
1月12日	北諫早中学校テニス部
1月17日	ウエスレヤン大学体験学習研修
1月19日	北諫早中学校テニス部
1月22日	ウエスレヤン大学体験学習研修
1月26日	ウエスレヤン大学体験学習研修（フォローアップ）
◆青少年団体等	
4月24日	笹原子ども会
5月21日	リスクマネジメント研修
7月３日	長田ジュニアクラブ
7月11日	リスクマネジメント研修（普通救命救急講習）
7月15日	堂崎第一自治会事前研修
7月22日	長崎教区少年連盟指導者研修
7月27日	飯盛公民館子ども講座
7月30日	堂崎第一自治会
8月８日	とりかぶと自然学校
8月22日	目代町第２分団子ども会
8月26日	諫早新体操クラブ
9月５日	小栗小学校サッカークラブ

利用日	団体名
◆青少年団体等	
9月7日	諫早市少年センター
9月18日	久山町滑川子ども会
10月16日	泉町子ども会
10月31日	白木峰をみどりにする会
11月13日	なかよし子ども会（馬渡町）
11月20日	高来町青少年健全育成会
11月21日	高来町青少年健全育成会
11月23日	白岩南部子ども会（事前研修）
12月12日	白岩南部子ども会
◆その他	
4月8日	市新規採用職員研修
4月20日	デイサービスセンター彩音
4月21日	デイサービスセンター彩音
4月23日	リスクマネジメント研修
5月13日	デイケア・ケイコム
5月19日	ボランティアのつどい
5月20日	きぼうの里
5月21日	リスクマネジメント研修
5月30日	ボランティアのつどいスペシャル
6月13日	ボランティアのつどい
6月18日	デイサービスなかやま
7月11日	リスクマネジメント研修（普通救命救急講習）
8月4日	平和を考えるつどい（市企画振興部）
8月6日	上山地区民生委員児童委員協議会
8月8日	久山台ニュータウン自治会
8月18日	小栗公民館大学講座
8月27日	長崎県社会福祉青年経営者会
9月25日	諫早交響楽団木管アンサンブル
10月5日	ビタミンプロジェクト会議
10月14日	市新規採用職員研修
12月10日	ＡＥＬ
12月14日	多良見東地区社会福祉協議会
12月19日	竹職人によるワークショップ
1月27日	諫早市子育てサポーター養成講座
2月11日、12日	ファシリテーション研修
2月11日、12日	青山こどもの城交流会
2月19日、20日	カウンセリング研修

利用日	団体名
◆実習受入れ	
5月4日～H23年1月29日	長崎大学実習（のべ50名）
6月1日	国家公務員初任研修（3名）
8月4日～7日	教育10年研修（諫早特別支援学校、1名）
◆行政等視察受入れ	
5月20日	東長崎地区民生委員
9月1日	太良町放課後子ども教室
11月5日	九州都市企画主管者会議
1月27日	兵庫県赤穂市議会
2月1日	大村・諫早地区行政相談員研修
2月19日	大牟田市教育委員会
◆講師依頼	
5月26日	福岡県北九州教育事務所
6月26日～27日	福岡県立英彦山青年の家
6月30日	大村市ＰＴＡ母親委員会
7月3日	佐賀県黒髪少年自然の家
7月10日	長崎県ＰＴＡ連合会
9月4日～5日	山形県神室少年自然の家（文部科学省補助事業）
10月15日	長崎県こども政策局（児童厚生員等研修会）
10月23日～24日	山形県朝日少年自然の家（文部科学省補助事業）
10月19日	島根県立東部生涯学習センター
10月20日	島根県立西部生涯学習センター
10月28日	長崎県こども政策局家庭教育講座・東彼杵
11月13日～14日	山形県神室少年自然の家（文部科学省補助事業）
11月15日	佐賀県児童厚生員連絡協議会
11月16日	佐賀県児童厚生員連絡協議会
11月27日	福岡県立少年自然の家「玄海の家」
11月27日	福岡ブロックＰＴＡ研究大会
1月23日	久留米市教育委員会
2月6日	大村市ＰＴＡ連合会研修会

楽しむ時は1人で
楽しむのではなく
みんなで楽しんだ
方がいいとわか
りました。

こどもの城　実績報告書　Vol. 2　　発 行／平成23年3月 諫早市 こどもの城
〒859-0307 長崎県諫早市白木峰町827-2
TEL.0957-24-8017 FAX.0957-24-8016

白木峰高原こどもの城　検索